

AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第32号

空中回廊

この企画展は重量級[麻生三郎展] / 会員のひろば / 愛知県美術館コレクションから[三沢厚彦《Animal 2008-01》] / 講座ダイジェスト [青騎士の今日性][青騎士のロシア人画家たち] / 友の会活動紹介



この企画展は重量級

麻生三郎展 じっくり向き合うと見えてくる芸術

2011年4月29日(金・祝) から 6月12日(日) まで開催

人間の存在を見つめ、絵画の本質を求めた画家、麻生三郎。彼は戦後を代表する画家の中でも、その重厚さで異彩を放っています。

展覧会主旨には「彼がこの世を去って10年。表面的なきれいさや可愛さ、わかりやすい目新しさもてはやされる今日だからこそ、麻生の重厚な作品世界を改めて見直し、その今日的意義を探る。」と記されています。今回の展覧会は麻生三郎を過去の作家としてではなく、現代社会の中でその画業をとらえようとするものです。

初期の摸索



麻生三郎は、1913年東京市京橋区本湊（現在の東京都中央区湊）の炭問屋に生まれ、少年期から絵や芸術に興味をもち、1930年には太平洋美術学校で絵を学びます。翌年には靄光、長谷川利

《男》1940年 行らとの交流も始

まり、動物の姿をデフォルメした、超現実的な作品を描いています。1938年には西欧を訪問し、ギリシャ彫刻やイタリア古典絵画に大きな刺激を受けたようです。帰国してから描いた《男》という作品は、写実的ですが何かただならぬ感じがします。

1941年には友人の瀧口修造や福沢一郎が検挙されるなど表現の自由が奪われ、その年には太平洋戦争が始まります。それでも麻生は、靄光や松本竣介らと「新人画会」を結成し、展覧会を3回も開催するなど、芸術活動を続けました。

闇の中にある光

終戦直前の1944年に出征しますが病気のため即日帰され、命拾いをします。戦況が悪化する不安

のなかで、妻やその年に生まれた1人娘を必死に描きました。執拗なまでに黒い絵の具を塗り重ねた闇の中に、かけがえのない存在として命を表現しているようです。残念ながら作品の多くを戦災で失ってしまいましたが、残った数少ない作品からも重厚な表現がうかがえます。

やがて子供や妻だけだった主題は身近な家族という枠を超えて「人間そのもの」の姿を表現しようとしていきました。

赤い空の下で

1950年代半ばになると、闇のような背景は、赤黒く圧迫感に満ちた街の風景に変わっていきます。「コウモリのように精神の超音波とでもいうようなものを発してとらえた風景や人物のようなもので、観る人もそのようにしてみると何かとらえられるかもしれません。」と深山学芸員。

作品《赤い空》には手で触れることのできるような、また人を押し潰すような重い空気が充満し



《赤い空》1956年

ています。太陽すら空に押し潰されそうになり、光を四方に狭められているようです。戦争が終わってからも、存在を脅かす社会の圧迫感と、それに抗いつつ生きる人間が描かれています。



《子供》1957年

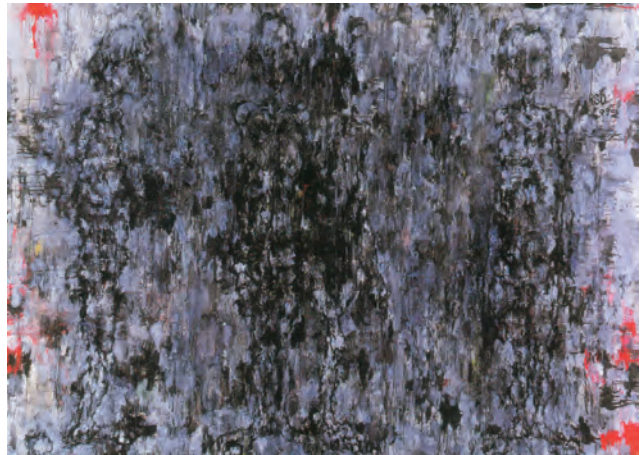
存在を否定するものへの抵抗

1960年代になると、人体すらも全体の形を失っていきます。1963年には十二指腸潰瘍の手術をし、そのあとで《寝ている男》の素描が生まれました。自分の肉体（内臓）を、描く対象として再確認したような素描で、その後の作品群と関連させて見ることもできます。《ある群像3》の背景は硬質な暗い灰色で、空気や時間さえも圧縮されたよう



《ある群像3》1970年

な無機質な空間です。よく見ると人体の一部や眼が描かれていて、その光る眼球は絵を見ている者を鋭く見返してくるようです。作品《仰向けの人》など、安保闘争での女学生の死に触発された作品も制作してはいますが、訴えているのは個人の死ではなく、人間の存在を否定するものへの抵抗や憤りです。



《りょうはしの人》1992年

60代半ばから娘で彫刻家の麻生マユ氏とともに彫刻も制作しています。作品には油絵と同じように執拗に粘土をつけたり削ったりしたあとが見られます。凹凸が多すぎて石膏取りも大変だったようですが、この《立体デッサン》のおかげで大きな絵画作品の混沌とした背景の中に、人間の姿がかるうじて把握できます。いままで分解されていた人の形は「人」としてまとまりをみせるようになり、周囲の空間と肉体とがせめぎ合うような震えた線により独特の形が生まれています。

麻生のどの作品にも、社会に押し潰されそうになりながらも存在を主張する人間が描かれています。この現代でも人間の存在を圧迫する目に見えない不安や社会からの孤立感に苦悩する人がいます。心が折れそうになったとき、この強く逞しい芸術に励まされると思うのは私だけでしょうか。

ぜひ、この重厚で強靱な絵画を、じっくり時間をかけて見つめてみてください。（小林克敏）

この記事は本展覧会を担当される深山主任学芸員へのインタビューを参考に構成しました。

会員のひろば

バス旅行 懇親・他館鑑賞会 (MIHO MUSEUM) 友の会特別鑑賞会 『美の精髓』展

バス旅行 懇親・他館鑑賞会 (MIHO MUSEUM)

3月13日、友の会の懇親イベントである日帰りバス旅行が開催されました。この企画は、昨年初めて開催され好評だったため、今春、2度目のツアーが実現したものです。



トンネルを通過して美術館へ

当日は暖かくて天気も良く、絶好の行楽日和でした。今回の行き先は滋賀県のMIHO MUSEUM。山奥にあり個人では行きにくい美術館です。そのことも手伝ってか、今回の参加者は前回は上回る58人！当初、バス1台、40名を想定して募集したのですが、急きょ、バスを2台にして、大所帯での訪問となりました。



美術館のレストランで昼食

MIHO MUSEUMに到着後、レストランで自然食の昼食をとり、展示館へ。レクチャールームで今回の特別展「長沢芦雪 奇は新なり」について担当の岡田学芸員に解説していただきました。その聴衆のなかに...おや？我らが県美術館

の村田副館長が紛れているではありませんか！今回のツアーに興味をもって、プライベートで飛び入り参加されたようです。

レクチャー後は自由観覧、の予定でしたが、自然発生的に「村田副館長によるガイドツアー」状態に。村田副館長には休日にもかかわらず、お仕事をさせていただき、ありがとうございました。

帰り道には信楽に立ち寄り、自由散策の時間を取りました。皆さん好み



解説する岡田学芸員



岡田学芸員のレクチャーに耳を傾ける

の陶器を買い求めては、他の参加者と自慢していました。

今回のツアーは会員どうしの交流・懇親も考え、座席指定に。行きの中では自己紹介をしました。その中で、「MIHO MUSEUMは3回目」などとおっしゃる方も何人かおみえになりました。初めて訪ねる私は、「さすがは友の会、熱心な人が多いんだな」と思っておりましたが、訪ねてみて納得。たしかに1度では回りきれない大きな美術館でした。

皆さん最後にはお隣どうしすっかり仲良しになり、満足げにバスを降りて家路に着かれました。
(イベント担当理事 森 健次)

友の会特別鑑賞会『美の精髓』展

昨年12月2日に「美の精髓 愛知県美術館の名品300」の特別鑑賞会が開催されました。はじめに、この展覧会を担当した古田美術課長から概要を聞きました。企画展と企画展の間の期間で、全館を使って所蔵作品全体を網羅した展覧会は5年に1度くらいしかできないこと。今回の全館所蔵作品展は牧野館長の退任記念企画ともいえる展覧会で、建設以前から20年以上この愛知県美術館のコレクション蒐集に関わってきた館長の案を中心に、日ごろ展示できない作品も果敢に展示したことなどを伺いました。

会場では古田課長はもちろん、牧野館長や村田副館長、高橋企画業務課長はじめ、多くの学芸員さんが勢揃いして解説してくれました。まさに友の会特別鑑賞会ならではの豪華な待遇です。

戸谷成雄の作品では村田副館長の指導のもと、特別に作品の上に乗って緊張感を感じながら鑑賞することができました。戸谷氏から木の方向をそろえて展示するように指示されていることや



解説にも作品への想いが込められる



展示の工夫を聞く会員たち
重量のある作品も手間をかけて展示したことなど、
多くの裏話なども聞くことができました。

クリムトの作品は県美のコレクションの中心であり愛知県美術館の宝であると同時に日本の宝であること、また世界的にも知られている大切な作品であり、海外からも借用依頼が多いことなどの説明もありました。海外の美術館で展示中であっても、今回の展覧会のために返してもらったほど大切な作品として展示されていました。

牧野館長からは、「木村定三氏から『日本一の美術館にしてくれ』と言われてコレクションを預かった」というお話がありました。

世界に誇る素晴らしい県美のコレクションを何度も繰り返し鑑賞することによって、新たな解釈や見方を発見したり、「また会えた」という親しさを味わったりして心ゆくまで堪能したいものです。

(小林克敏)

役職名等は開催当時のままご紹介しています。

愛知県美術館友の会は、団体も入会していただくことができます。現在ご入会いただいている団体は、名古屋芸術大学、株式会社MARUWAの2団体です。ご協力ありがとうございます。



名古屋芸術大学
大学院音楽研究科/音楽学部/人間発達学部
〒481-8503 愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
TEL:0568124-0315 FAX:0568124-0317
大学院美術研究科/美術学部
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
TEL:0568124-0325 FAX:0568124-0326
大学院デザイン研究科/デザイン学部
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
TEL:0568124-0325 FAX:0568124-0326



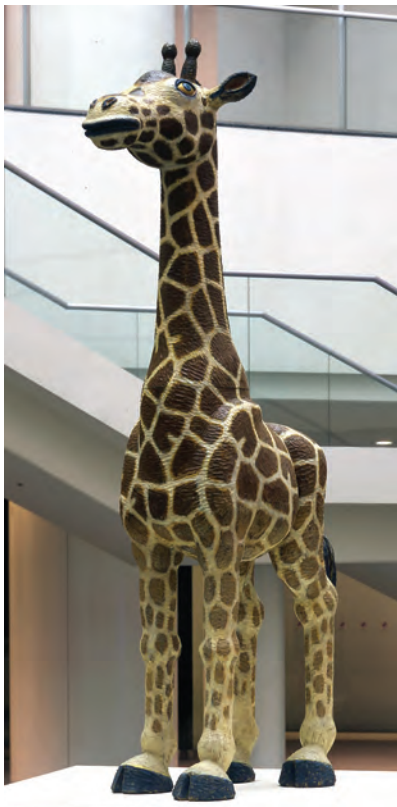
株式会社 MARUWA
〒488-0044 愛知県尾張旭市南本地分原町三丁目 83 番地
TEL (0561) 51-0841
<http://www.maruwa-g.com>
株式会社 MARUWA SHOMEI
〒110-0015 東京都台東区東上野一丁目1番12号栗橋ビル
TEL (03) 5812-0870
<http://www.maruwa-shomei.com>
株式会社 MARUWA QUARTZ
〒963-7704 福島県田村郡三春町大字熊耳字大平 7-1
TEL (0247) 62-0012
<http://www.maruwa-g.com>

愛知県美術館コレクションから 深く知ると、もっとみえてくる 三沢厚彦 《Animal 2008-01》

(編)ここでご紹介する所蔵作品《Animal 2008-01》を、本会報表紙に掲載しました。

一昨年の芸術文化センターでのイベント「Animals in AAC」、そして今年のあいちトリエンナーレ2010で、三沢厚彦(1961-)によるユニークな動物彫刻をご覧になった方は多いでしょう。そのなかの一点、《Animal 2008-01》が、愛知県美術館の所蔵作品の仲間入りをしました。

現代美術を読み解くために膨大な文脈や美術史を要求されて辟易している人にとって、三沢作品は清涼剤のように感じられるかもしれません。あるいは、いまこの時代に、具象的な、しかも動物という身近でありふれたモチーフが選択されているということに、かえって戸惑いを覚えるかもしれません。しかも、表面がツルリとした動物フィギュアであればまだサブカルチャーなどの文脈と交差するのですが、樟(クスノキ)という素材の生々しさがそのような解釈も拒んでしまいます。



《Animal 2008-02》2008年

しかし、三沢自身は自らの作品が現代美術であるか、そうでないかという評価に拘泥していません。三沢作品の背景には円空から橋本平八、高村光太郎などの様々な先達の存在があるのですが、それら過去の作品を現代美術家的な手つきで剽窃したり再解釈したりするのではなく、木彫というジャンルにあらためて真正面から取り組んでいる印象を受けます。それでは、三沢作品の独自性、豊かさはどこにあるのでしょうか？

私たちはよく動物のイメージを何かの象徴に用います。鳩を平和の象徴として見たり、ライオンを力や権力の象徴として紋章に用いたり、このような動物の象徴的イメージは古今東西至る所で目にすることができます。一方で三沢のライオンからは、一切の象徴的な効果が奪われており、ただゴロンと物体として存在しているかのようです。そこには百獣の王たるライオンの姿はありません。ある動物の、「らしさ」のような紋切り型のイメージは、そこから広がっていかないと三沢は述べています(「Animals in AAC」リーフレット掲載のインタビュー参照)。

木を彫り始める前に、三沢は何枚もドローイングを描きます。それから、そのドローイングの自由な線を、ただ写すのではなく形を探るための触媒にしなが



《Animal 2008-01》2008年

めてゆきます。「手探り」という言葉がこれほど似合う作家もいないでしょう。そうした手探りを通して、ただそこにあるものとして動物へとどんどん近づいていくのだと思います。そういう動物の姿に対する私たちのある種の戸惑いのような感情が、三沢彫刻の魅力の核心へと近づくための第一歩となるのではないのでしょうか。

(学芸員 副田一穂)

学芸員の横顔

副田一穂(そえだ・かずほ)
愛知県美術館学芸員
福岡県出身。
あいちトリエンナーレ2010などを担当。
趣味は多肉植物の栽培とこけし蒐集。



講座ダイジェスト

記念講演会『青騎士の今日性』東京国立近代美術館 松本透氏

友の会講座『青騎士のロシア人画家たち』美術課長 古田浩俊氏

記念講演会 『青騎士の今日性』

2月19日、東京国立近代美術館副館長の松本透氏による講演会が行われました。松本氏は、日本におけるカンディンスキー研究者として広く知られており、数々の論文や翻訳書なども発表されています。

今回は「青騎士の今日性」という演題で、およそ100年前に遡る青騎士の時代と、現代に通じる共通性について講演されました。

松本氏は「100年前の青騎士について調べていると、現代美術に通じるものを感じる。また現代美術を研究していると、青騎士の生まれた20世紀初頭の時代と重なるものがあることに気づく」と述べています。

青騎士の目標とは、絵画や音楽・演劇、宗教や思想、時代や世代、民族性や地域性などのあらゆる境界線を取り除き、芸術における精神的なものを追求していくことでした。松本氏は「青騎士の求める精神的なものとは、カンディンスキーの『印象』『即興』『コンポジション』等



スライドを交えて講演される松本氏

のシリーズに端的に現れている」と述べています。

心の目で見、心の耳で聞く内面的な性格を持つ芸術です。斬新な青騎士の展覧会は、当時の人々にとって大きな衝撃だったことでしょう。

後半では、展示作品以外の作品も含めた映像を見ながら、丁寧な解説を聞くことができました。抽象芸術について学んでいく時間は、今までの自分に色が付いていくようなクリアで新鮮な気分でした。
(喜田 泉)

友の会講座 『青騎士のロシア人画家たち』

3月6日、開催中の「カンディンスキーと青騎士展」にちなみ、愛知県美術館の古田浩俊美術課長による友の会講座が開かれました。

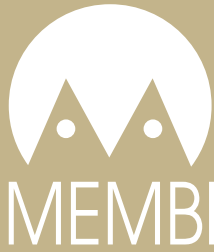
カンディンスキーはオデッサという町で育ちました。オデッサは黒海に面したウクライナの都市です。日本でいえば神戸や横浜のイメージに近い国際的な港町。この影響は、後に繰り返し用いられる舟や櫂のモチーフから窺い知ることができます。



20世紀のロシア芸術について熱心に聴講する

講演では、1901年にオデッサで開かれた南ロシア美術家展から1914年の第一次世界大戦勃発までのカンディンスキーの活動を丹念に紹介していただきました。モスクワやオデッサで開かれる展覧会に多くの作品を出品したこと、『芸術の世界』というロシアの象徴主義の雑誌に「ミュンヘン通信」を寄稿していることなどから、ミュンヘンに出ても、ロシアの芸術界とのつながりがあったことがよくわかります。当時のエピソードを交えながら、スライドを用いて展覧会の様子、出品作品や資料を見せていただきました。

クビーンやサバネーエフなど、活発な活動を展開した画家たちでしたが1914年の第一次世界大戦勃発を機に、それぞれの道を歩みます。カンディンスキーの代表作が創作された時代の、雰囲気を感じることができました。
(松下智子)



AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

美術館から

愛知県美術館ブログのご紹介

愛知県美術館では、2008年から公式ブログを開設しています。美術館ウェブサイトのトップページから入ることもできます。アドレスは次のとおりです。

<http://blog.aac.pref.aichi.jp/art/>

美術館のウェブサイトはチェックしていても、ブログまでは見ていないという方もおられるのではないのでしょうか。愛知県美術館の場合、ウェブサイトでは展覧会やイベントなどの公式情報をお知らせしていますが、ブログでは美術館の日常的な活動について、各担当者がより親しみやすくお伝えしています。執筆は、館長以下学芸員全員(!)が行っており、それぞれが最もよく知る美術館の多様な仕事をご紹介します。過去のブログ記事の中では、美術館にとって大変重要な友の会による活動が、学芸員の立場から紹介されたこともあります。

学芸員の生の声をお伝えする美術館ブログ、各学芸員の専門や個性を知っておられる友の会の皆様には特に楽しんでいただけるのではないのでしょうか。開催中の展覧会にまつわる記事などもアップされます。ぜひ一度お目通しの上、ご愛読いただければ幸いです。

(元 愛知県美術館学芸員 馬淵美帆)

友の会活動紹介

「美の精髓 愛知県美術館の名品300」

12月 特別鑑賞会(昼・夜)

「カンディンスキーと青騎士展」

2月 記念講演会(松本透氏)「青騎士の今日性」

2月 特別鑑賞会(昼・夜)

3月 講座(古田美術課長)「青騎士のロシア人画家たち」

3月 バス旅行 懇親・他館鑑賞会(MIHO MUSEUM)

定例活動

美術館モニター 1回

所蔵作品管理 のべ12回

木村コレクション...風呂敷洗濯・補修手入

洗濯...作品用さらし・作業用手袋・各種布類

備品...枕・座布団・紐の制作

キャプションの整理

発送 のべ2回

受付 のべ3回

会報発行 第32号発行

ホームページ 随時更新

中面で紹介 裏面で紹介



特別鑑賞会

「カンディンスキーと青騎士展」を鑑賞。鮮やかな色彩とリズムに圧倒されました。作品の前でシェーンベルクの曲を聴くという贅沢な体験も。厳しい時代に作品を守り抜いたミューンターにも敬服しました。(Keiko.K)

特別鑑賞会

繰り返し作品の前に立って見るのが自分のスタイルです。やがて「値踏みするような目で見なくてよくなる幸せ」が得られます。そういう自分に所蔵作品は大切なものたちです。「美の精髓展」にて。(清水一男)



バス旅行 懇親・他館鑑賞会

春うらら、バスに揺られて信楽へ。MIHO MUSEUMで「長沢芦雪」の世界に浸りました。奇は新なり...。自由奔放で無邪気、奇抜で斬新。堂々、我が道を行く絵師のしたり顔が透けて見えました。(Mikiko)

これからの企画展のご案内

麻生三郎展

4月29日(金・祝) 6月12日(日)

プーシキン美術館展 フランス絵画300年

7月8日(金) 9月4日(日)

島田章三展

9月16日(金) 10月30日(日)

生誕100年 ジャクソン・ポロック展

11月11日(金) 2012年1月22日(日)

友の会入会のご案内

友の会の詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は、下記までお問合せ下さい。

10階愛知県美術館受付

友の会事務局(火・木・金・土 10:00-16:00)

052-971-5511(代) 内線347

tomonokai@aac.pref.aichi.jp

編集後記

今春、牧野前館長の退任に伴い就任された村田新館長は、友の会と会報の誕生の時、当時学芸員として大変ご尽力くださいました。17周年を迎える友の会が、美術館と供に一段と飛躍できる予感がいたします。

(平松章子)

□編集 小林 克敏/水野 愛子/大矢 真美代/喜田 泉
平松 章子/松下 智子/宮崎 玲子/森 健次

□協力 愛知県美術館

□発行 2011年4月

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市中区東桜一丁目13-2

愛知芸術文化センター内

TEL: 052-971-5511(代) 内線347

FAX: 052-971-5617

E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp

美術館ウェブサイト: <http://www-art.aac.pref.aichi.jp>